

和辻哲郎—キルケゴールの“卒業生”

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

若き日の和辻の二大研究

倫理学者・文化史研究者として高名な和辻哲郎 (1889～1960) は、1915 年 (大正 4)、26 歳の若さで『ゼエレン・キエルケゴール』を出版した。日本におけるキルケゴール研究史の劈頭を飾る堂々たる著作である。和辻はその 2 年前、24 歳の時に『ニイチエ研究』を刊行している。この 2 冊は『和辻哲郎全集』第 1 巻に収められ、合わせて 680 頁にもなる。20 代前半に大部の研究書を 2 冊も著したのは、まさに驚くべきことだ。

ところが、この後、和辻は研究の方向を大転換してしまう。1919 年 (大正 8) に『古寺巡礼』、翌年には『日本古代文化』を刊行、また 1926 年 (大正 15) には『日本精神史研究』と言うふうに見事なまでの日本回帰である。『人間の学としての倫理学』(1934 年 [昭和 9]) では、彼は自らの倫理思想として「問柄の倫理」を主唱した。これらの書物を読むと、ニーチェやキルケゴールの姿がすっかり希薄になった感がある。和辻は彼らの思想を“卒業”してしまっただろうか。

ニーチェやキルケゴールは、当代の爛熟したキリスト教の内にもヨーロッパ精神の“病根”を発見した。ニーチェはキリスト教からの完全脱却、キルケゴールは徹底したキリスト教の信仰深化を通じて、このヨーロッパの病を克服しようとした。和辻はドイツ語文献を読み込み、両者の思想の全体像を捉えるや、直ちに手際よく彼らの収穫の果実を日本人読者に提示してみた。20 代前半でこれを成し遂げることができたのは、旧制一高に首席で入った秀才和辻ならでは力技である。

和辻哲郎の秀才ぶりはそれだけにとどまらず、彼らの姿勢がヨーロッパの精神的根源に向かうものであることにも目敏く気付いた。だとすれば、次なる課題は、今度は自分自身が日本の精神的根源を探究することではないか。この転身もまた秀才らしい早業であった。したがって、彼の日本回帰は「転向」であって、しかも「転向」ではないとも言えるのである。

ニーチェやキルケゴールは“卒業”可能か

和辻の「転向」過程は、その名もずばり『偶像再興』という随想集 (1918 年 [大正 7])⁽¹⁾ から垣間見ることができる。注目すべきは、この中の「樹の根」という小編である。和辻が日本という樹の根に見出したのは、仏教美術や日本文化であった。これらは、彼自身にとっての樹の根でもあった。彼は、この樹の根を掘り起こす課題に気が付いた時、ニーチェやキルケゴールの問題意識とはそれ以上に付き合うことを止めた。和辻は自己の課題の発見によって、彼らを“卒業”したのである。

『偶像再興』は、その表題からして、ニーチェやキルケゴールに対する訣別宣言であると言えよう。彼らはキリスト教の現状の中に「偶像」を読み込み、その「偶像」を打破する人間のあり方をそれぞれ「超人」、「単独者」と規定したのであった。その「偶像」を、いまや和辻は「再興」しようというのである。「偶像崇拜の心理」と銘打たれたこの随想集最後の文章の中で、和辻は奈良に遺された古代の仏像に、永遠のいのち、「仏」の象徴の実現された姿を見たことを述べている。それは宗教と芸術とが一体化された「神聖な偶像」であった。それゆえ、現代に生きる我々もまた、祖先がそのように「偶像」を作り、礼拝した心理に思いを馳せ、これ

を尊重しなければならない、というわけである。

しかし、ニーチェやキルケゴールは、そもそも“卒業”できてしまうような思想なのだろうか。ニーチェは当初、生の哲学者として注目されたが、今日ではポスト近代を先取りする思想家として新たな読み直しがなされている。キルケゴールは当初、文学やキリスト教の文脈で受容されたが、後に実存主義の父として着目され、今ではこの枠組みを超えて、彼の著作全体の読解が進められている。

和辻のキルケゴール研究の動機は、彼が「いかに生きるべきか」を示してくれる人間モデル、思想モデルになるのではないかとこのころにあった。この問い自体が、人生を無限の可能性を秘めたものとして捉える、いかにも青年らしいロマン主義的な問いである。和辻は東京帝大の学生時代、小山内薫や谷崎潤一郎と共に第 2 次『新思潮』の同人として小説や戯曲を書いており、そうした文学の世界を大きな契機にしていたのである。彼がキルケゴールに魅かれたのも、イプセンの戯曲『ブランド』のモデルとしてその名前を知った時であった。

和辻は、文献の不足もあって (当時はまだドイツ語による第一次翻訳のシュレンプフ版の時代であった)、キルケゴールの人生観を美的段階、倫理的段階、宗教的段階という図式で捉えている。しかし、この論述が偽名著者の作品中で語られていることの意味合いや、信仰教化の講話がキルケゴール自身の実名で同時に著されており、そのこととの弁証法的な関連性までは、和辻は考え及ぶことはなかった。これらのことは、デンマーク語原典に基づく、徹底した文献研究が近年ようやく解明し得たことなのである。

宗教によって自らの心魂がつかまされると同時に、生身の人間としてどこまでもこれに抗おうとする葛藤や苦闘は、和辻にはついに無縁であった。『古寺巡礼』の仏像描写に典型的に見られるように、彼にとっては宗教そのものが美的なものであった。彼のキルケゴール研究の着地点は、後年付加された「付録 結論 キエルケゴールと北方の憂愁」⁽²⁾ に端的に示されている。「付録」なのに「結論」と銘打たれた、この異様なタイトルは、彼の方向性の大転換を示唆している。つまり、彼はキルケゴールの生涯と思想のうちに「北方の憂愁」という風土性を見出したのである。そして彼は本書を書き終えると同時に、思想の風土性に着目し、また彼自身の風土性に回帰したのである。

和辻哲郎はキルケゴールを「詩人哲学者」と呼んだ。そして今度は、彼自身が「文人哲学者」と評されることになる。確かに、和辻は単なる秀才研究者の域を超え、豊かな学識と文才を有する学者には違いない。だが、ニーチェやキルケゴール、また西田幾多郎などのように、彼が独創的な一個の思想家だったかとなると、これはまた別の問題だと言えるだろう。

[註]

- (1) 『偶像再興』は『和辻哲郎全集』第 17 巻 (岩波書店) に所収 (1～284 頁)。
- (2) この部分は 1947 年 (昭和 22) の改訂新版にも見られないが、全集版で読むことができる。『和辻哲郎全集』第 1 巻、667～679 頁。